無標可能表現に関する一考察

楠本 徹也

はじめに
1. 学習者の誤用の実態
1.1 誤用の実例
1.2. 誤用の原因
2. 無標可能表現の特徴
2.1. 可能とは
2.2. 意志性
2.3. 自他性
2.4. 被動性と再帰性
おわりに　－日本語教育の視点から－

はじめに

本稿は日本語における無標識の可能表現に注目し、その成立要因を探っていく。そして、そのような可能表現には意味構造において被動性および再帰性が認められることを主張する。

日本語教育の現場において、日本語学習者（以下「学習者」）の作文に以下のような誤用が見られることがある（市川 1997:169-170、(→）は正用、〈　〉は学習者の出身国)。

（1） a．日本語が少し**わかれる**（**→わかる**）ようになりました。〈フィリピン〉
　　 b．このコップは落としても、**割られない**（**→割れない**)。〈中国〉

このような誤用は日本語の可能表現に関する正しい理解がなされていないことに起因する。即ち、日本語では無意志動詞 [1)]は-eru/-rareru の接辞を付けて可能形にできない、また、無標識で可能の解釈がなされる自動詞表現がある、ということを学習者がきちんと教えられていない、または習得されていないことが窺われる。

このことを議論の出発点とし、本稿は日本語の無意志動詞による可能表現について考察していく。特に意志性、自他性との関りに注目し、日本語における可能の概念を明らかにしていき

たい。

可能の解釈がなされる無意志動詞構文に関しては、数々の研究がなされている（ヤコブセン 1989、張 1998、石川 1991、乾 1991、青木ひろみ 1997、長友 1997、龐 1999、都築 2001、大崎 2005、姚 2006、呂 2007 など）。そして、このような特徴を有する動詞や動詞文に対して「結果可能表現」（張 *ibid.*）「無意志主体可能動詞」（乾 *ibid.*）「自動詞可能」（大崎 *ibid.*）「無標可能文」（姚 *ibid.*）などと呼称している。本稿では、形態的特徴がより明確に表せるように「無意志動詞による無標可能表現」（以下短く「無標可能表現」）と称することにし、以下のような表現の成立要因を探っていく。

（２） ａ．この薬を飲めば、１週間で治る。
ｂ．一生懸命努力すれば、試験に受かる。
ｃ．どんなに長く住んでいようと、ここの生活には慣れない。
ｄ．もう少し詰めれば、まだ入る。
ｅ．いくら押しても、ドアが開かない。
ｆ．肩が痛くて、腕が上がらない。

（２a）～（２f）は（１a）と合わせて学習者が間違えやすい表現としてよく知られているものである。それぞれの動詞に対して（２a）～（２c）では「治れる」「受かれる」「慣れられない」のような形態的誤用を犯し、（２d）～（２f）では「入れられる」「開けられない」「上げられない」のように自動詞と対応する他動詞の可能形を使って語用上不適切な文をつくってしまいがちである。

このような誤用の原因は何かというところから議論を始め、可能の概念的特性を探りながら無標可能表現の実体を明らかにしていく。

1. 学習者の誤用の実態

まずはじめに、学習者は可能表現に対してどのような誤用を犯すか見てみる。そして、その原因として母語干渉の可能性を予想し、本稿で考察の対象となっている無標可能表現に関して学習者の母語との対照を試みる。

1.1. 誤用の実例

学習者が実際にどのような誤用を犯すか、独立法人国立国語研究所の「学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース（作文対訳 DB）オンライン版」を使い調べてみた。

その結果、（３a）～（３e）のように単に動詞に「られる」を付けて可能形にするといった形態的誤用が圧倒的に多いことが分かった。学習者は可能形と受身形を混同しているのではないかと思われる。（以下、例文中（→）は筆者が正しく直したもの。）

（３）ａ．例えば中国では毎年のたばこの輸入のせいは何億元を浪費してしまたこの金を学校の施設を増しいけば、貧しいで学校に**入られない**（→**入れない**）子供はだんだん少なくになろうと思う。［中国 CN010J.TXT］

ｂ．祖母は子供の時日本とアメリカもで住んでいましたので、日本語と英語が**しゃべられました**（→**しゃべれました**）が、どちらの言語が専門的にできませんでした。［米国 us006e］

ｃ．たばこが大好！という人間はまわりのなが息（→長生き）が欲しい人間とかけんこうな生活が欲しい人間にじゃまがならないよう気楽にたばこが**吸えられる**（→**吸える**）たばこ専用の公間が公共の場所で禁煙と同時に立法化になることを望んでみます。［韓国 KR126J.TXT］

ｄ．ラマダンというのは一か月断食するべきです。つまり、食べることやら飲むことやらできません。または、悪いこともできないはずです。これの目的は自分の行動を改良していい人に**なられます**（→**なれることです**）。［マレーシア ML027J.TXT］

ｅ．ハリラヤの時は、みんなで田舎に帰ります。でも、何人か仕事のためなど、田舎に**帰られません**（→**帰れません**）。［マレーシア ML079J.TXT］

形態的誤用ほど多くはないが、（４）のように、本来可能形に出来ないのに-eru/-rareru の接辞を付けて可能形にしてしまっているといった誤用も少なくない。母語訳では可能態（下線部）が見られるので、それが日本語に転移したのであろう。

（４）煙草は体に悪く**なられます**（→煙草を吸うと体が悪く**なります**）。いつも煙草すう男は普通人より肺炎、心臓病、呼吸道伝染病をなるの机会はすっど大きです。［中国 CN061J.TXT］

対訳：烟<u>会</u>使人身体不好，总吸烟的人与普通人相比得肺炎、心脏病、呼吸道感染的机会要大得多。

このような誤用は、ほかに以下のようなものがある。（母語訳省略）

（５） ａ．たばこの煙を吸ったら、たばこを吸わない人の方が吸う人より肺がんになる可能性が高いことが**分かれます**（→**分かります**）。［タイ TH065J.TXT］

ｂ．計算してみるとどのくらいかお金を使いましたというものを**知られる**（→**知る**ことができます）。［マレーシア ML043BJ.TXT］

ｃ．冬がないから美しい雪景を**見えられない**（→**見えない**）しスキーもできない。［シンガポール SG068-1.TXT］

ｄ．それが聞くと、なぜかタバコを吸い続けるだろうか。自分のことを愛がないらしい。喫煙者が喫煙によって緊張を**消えられる**（→緊張が**消える**？ 緊張を**消すことができる**？）と言った。［マレーシア ML004J.TXT］

（４）（５）に見られるように、無標であるべき動詞に-eru/-rareru の接辞を付けて可能形にしてしまうという誤用が実際にあることが分かる。これは可能形を持つ母語からの影響が考えられるが、このことを含めて、誤用の原因は何か考えてみる。

1.2. 誤用の原因

外国語教育における学習者の誤用の原因には、知識不足、練習不足、その場限りの一時的な mistake、規則の過剰般化、母語干渉などが考えられる。これらのどれが誤用の原因かを特定するのは難しいが、少なくとも、知らないことは学習者の発話や作文に反映されることはないので、学習の入り口となる教科書およびその教師用指導書に可能形についてどう書かれてあるか調べてみることは意味がある。また、習得が進んだ段階においても母語からの干渉はなかなか消えないものである。このことより、学習者の母語との対照も行ってみたい。

1.2.1. 教科書・教師用指導書での記述

日本国内外で使用されている日本語教科書とその教師用指導書計１４冊[2)]を対象とし、可能形が導入される課において可能形がどのように説明されているか調べてみた。特に、意志性に関する記述がどうなされているか、無標可能表現の説明があるかどうかに着目した。

結果として、当然ながら、１４冊すべてに-eru/-rareru の接辞の付け方といった形態的説明がなされている。しかし、意志性や無標可能表現に関する記述があるのは１４冊中以下の６冊にとどまっている。

（６） ａ．『みんなの日本語初級Ⅱ翻訳・文法解説英語版』27 課 p.14

わかる, which includes the meaning of possibility itself, does not change into わか

れる.

b.『文化初級日本語Ⅱ教師用指導手引き書』第 22 課 p.27 教師への注意書き

「分かる」「知る」「慣れる」「増える」「減る」「上手になる」[3]などもともと可能の意味あいを含んだ言葉や物の変化を表す言葉は、可能形にならないので注意する。

c.『Situational Functional Japanese Volume 2: Notes Second Edition』14 課 p.162

Potential verbs can be formed only from verbs whose actions can be controlled by the actor; therefore verbs whose actions cannot be controlled by the actor, such as ある *to exist/have*, 開く *to open*, 閉まる *to close*, 決まる *to be decided* do not have potential forms.……Although potential verbs are originally formed from verbs whose actions can be controlled, the resulting potential verbs cannot be controlled. 見える, 聞こえる(L12GNⅦ), できる *can* (this lesson) and わかる *to understand* are also potential verbs.

d.『実力日本語（下）単語・文法解説書（中国語版）』31 課 p.99、中国語訳 p.32

・可能動詞になるのは、意志動詞に限られる。

×雨が降る　×窓が閉まる　×間に合う　×力がある

・「知る」は「知ることができる」の形があるが、可能動詞はない。

・「わかる」は、意味的に既に可能性を含んでいるので、「できる」の形も可能動詞もない。

e.『高职高专新概念日语教程２』第２課 p.23　※原文は中国語

以下のような無意志動詞は可能形ができない（例：分かる→×分かれる）ので注意する。

例：ある、要る、分かる、知る、慣れる、くれる、落ちる、間に合う、(財布を)落とす、(雨が)降る、晴れる、(窓が)開く/閉まる、(大学に)受かる、(試験が/建物が)できる、等々

但し、「形容詞ク形/～に＋なる」は可能形ができる（例：大きくなれる、友達になれる)。

以下のような自動詞文は、文脈により何かができる、またはできない、という解釈ができ、動詞の形は可能ではないが意味は可能を表している。

例：鍵がかかっているので、ドアが開かない。

一生懸命勉強したら、大学に受かる。

かばんが小さくて、本が全部入らない。

ここは砂地なので、草が生えない。

これらの自動詞は無意志動詞である。無意志動詞は可能形にはならないので、上記のような文において「開けない」「受かれる」「入れる」「生えれる」と可能形にしないように注意する。

f．『Japanese: The Spoken Language Part 3』L25A p.8

For the most part it is operational verbals that have potential derivatives. Affective verbals like **aku**, **kieru**, **simaru**, and **wakaru**, for example, have no corresponding potentials. …… The meaning of those basic affective verbals includes the idea that occurrence is possible.

これらを見てみると、「分かる」のような動詞は形態的に可能形にできないという説明が多い。しかし、意志性に言及し無意志動詞は可能形にできないという原則を明確に表しているのは（6c）（6d）（6e）（6f）で、無標可能表現について説明しているのは（6e）だけである。

全般的に見て、無意志動詞は可能形にできないことを明確に述べている、また、無標で可能の意味を表せる自動詞文の説明をしている教科書や教師用指導書は非常に少ないと言えよう。したがって、これらの可能表現は、教師が意識的に導入しなければ、学習者は目に触れることも教えられることもなく終わってしまい、それが誤用に繋がることは十分考えられるであろう。

1.2.2. 母語干渉

誤用の原因の一つに母語干渉がある。但し、前述したように誤用の原因は様々な要因が複合されているものであるので、日本語と学習者の母語に違う（または同じ）ところがあるからといって、それにより負（または正）の転移が生ずるとは必ずしも言いきれない。それゆえに、ここでは、学習者の母語における可能の形態的表れが日本語における形態的誤用、即ち不必要な可能形の使用に繋がることがあり得るという程度にとどめる。

まず、日本語の無標可能表現に対して、学習者の母語に可能形態が表れるかどうかを見るために、前記例文（2a）～（2f）を含めた代表的な無標可能文の対訳を英語、フランス語、イタリア語、中国語、韓国語、ベトナム語、インドネシア語、アラビア語で試みる[4)]。各言語の可能を表す形態部分には下線を引いてある。なお、ここでは可能形態の有無を簡易対照するための資料として提示するのみで、詳しい対照分析は後の機会にまかせる。

（7） a．日本語が少し分かるようになりました。

I can understand Japanese better.

Je comprends un petit peu mieux le japonais maintenant.

Ora conosco un po' di giapponese.

日语稍微懂了一点。

일본어를 조금 알 수 있게 되었습니다.

Tôi ã có thể hiểu được một chút tiếng Nhật rồi.

Saya mulai bisa sedikit mengerti bahasa Jepang.

اصبحت افهم اللغة اليابانية قليلا

b．新聞は、辞書をひけば、ほとんど分かります。

I can read and understand the newspaper with a dictionary.

Avec le dictionnaire, j'arrive plus ou moins à lire le journal.

Se consulto il dizionario, riesco a leggere i giornali quasi del tutto.

如果查字典的话，报纸大概能看懂。

신문은 사전을 찾으면 거의 알 수 있습니다.

Nếu như tra từ điển, tôi có thể hiểu được hầu hết các bài báo.

Kalau buka kamus, saya bisa mengerti sebagian besar isi surat kabar.

يمكنك فهم معظم ما بالجريدة اذا استخدمت القاموس

c．この薬を飲めば、１週間で治ります。

Take this medicine and you will be well in a week.

Avec ce médicament, tu seras remis en une semaine.

Se prendi questa medicina, guarisci in una settimana.

喝了这个药的话，一个星期就会治好。

이 약을 먹으면, 1 주일에 낫습니다. (나을 수 있습니다.)

Nếu uống thuốc này sẽ khỏi trong vòng một tuần.

Kalau minum obat ini bisa sumbuh dalam satu minggu.

ستشفي خلال اسبوع واحد اذا تناولت هذا الدواء

d．一生懸命努力すれば、試験に受かるでしょう。

You can pass the test if you try very hard.

Je pense que si tu fais des efforts, tu réussiras tes examens.

Se ti impegni con tutte le forze, supererai l'esame.

如果不惜余力的努力的话，一定会考上的。

열심히 노력하면 시험에 합격할 수 있겠지요.

Nếu chăm chỉ nỗ lực thì có lẽ sẽ qua được kì thi.

Kalau kamu bersungguh-sungguh, maka kamu akan lulus.

اذا بذلت اقصي جهدك فاعتقد انك تستطيع ان تنجح بالامتحان

e．どんなに長く住んでいようと、ここの生活には慣れません。

No matter how long I live here, I can never get used to it.

Je ne me ferai jamais à cet endroit, aussi longtemps que j'y reste.

Non importa per quanto tempo ci starò, non mi abituerò a questa vita.

无论住多久，也习惯不了这里的生活。

아무리 오랫동안 살려고 해도, 이 곳 생활에는 익숙해지지 않습니다.(익숙해 질 수 없습니다.)

Dù có sống ở đây lâu thế nào chăng nữa thì tôi cũng không thể quen được với cuộc sống ở đây.

Berapa lama pun tinggal di sini, tetap tidak bisa menyeseaikan diri.

لا استطيع ان اعتاد الحياة هنا مهما طالت معيشتي بها

f．もう少し詰めれば、まだ入りますよ。

There will be more room if you squeeze in the stuff more.

Il reste encore de la place, nous pouvons nous serrer encore un peu.

Se vi stringete un altro po', si può ancora entrare.

再稍稍塞一下，还可以装进去的呀。

조금만 더 눌러 담으면 더 들어갈 수 있어요.

Cứ nhét thêm chút nữa thì vẫn còn nhét được đấy.

Kalau diatur, masih bisa masuk.

اذا حشرت اكثر قليلا فيمكنك وضع اشياء اخرى

g．いくら押しても、ドアが開かないです。

The door won't open no matter how hard I try.

J'ai beau appuyer, la porte ne s'ouvre pas.

Per quanto spinga, la porta non si apre.

无论怎么推，门都打不开。

아무리 눌러도, 문이 열리지 않습니다.

Ấn thế nào cửa cũng không mở ra.

Walaupun sudah didorong, pintunya tetap tidak bisa dibuka

لا استطيع فتح الباب مهما حاولت

h．肩が痛くて、腕が上がらないです。

I can't put my arm up because there's a pain in my shoulders.

Mes épaules me font tellement mal que je n'arrive pas à lever les bras..

Mi fa male la spalla e non riesco ad alzare il braccio.

我肩膀疼，胳膊抬不起来。

어깨가 아파서, 팔이 올라가지 않습니다.

Vai au quá không thể nhấc tay lên được.

Lengannya tidak dapat digerakkan karena bahunya sakit.

لا استطيع رفع ذراعي لأنه يؤلمني

各言語に表れる可能形態の有無を表にしてみた。

表１：各言語に表れる可能形態の有無（○は有り、×は無し）

	英語	フランス語	イタリア語	中国語	韓国語	ベトナム語	インドネシア語	アラビア語
（7a）	○	×	×	×	○	○	○	○
（7b）	○	○	○	○	○	○	○	○
（7c）	×	×	×	○	○	×	○	×
（7d）	○	×	×	○	○	○	×	○
（7e）	○	×	×	○	○	○	○	○
（7f）	×	○	○	○	○	○	○	○
（7g）	×	×	×	○	×	×	○	○
（7h）	○	○	○	○	×	○	○	○

表１を見てみると、「（7b）新聞は、辞書をひけば、ほとんど分かります」「（7f）もう少し詰めれば、まだ入りますよ」「（7h）肩が痛くて、腕が上がらないです」においては、ほぼ全ての言語が可能形態をとっている。言語別では、フランス語とイタリア語が可能形態をとるものがあまり多くない。データが質量ともに不十分なので、これらのことから何かを結論付けることは出来ないが、日本語の無標可能文が、全てではないにしろ、外国語では有標の可能形態で表されることが分かる。

学習者の誤用の実態を概観し原因を予想したところで、それでは、学習者に無標可能表現を正しく教えるためにはどうしたらよいのであろうか。それには、まずは無標可能表現の本質を正しく把握しなければならない。次節より、無標可能表現の特徴を探っていく。

2. 無標可能表現の特徴

無標可能表現は「可能」「意志性」「自他性」「主体の有性性」の４つの文法範疇を内包していると考えられる。それぞれの概念特性を明らかにし関係性を探っていく。

2.1. 可能とは

そもそも可能とは何か。形態的には-eru/-rareru の接辞付加、「～ことができる」、「～得る/得ない」（認識可能、金子 1980）などの形で可能が表される。しかし、（2a）～（2f）に見られるように無標識で可能を表す動詞の一群もある。-eru/-rareru の接辞が不可の動詞のうち、状態変化を表す自動詞がそれに当たる。本稿で問題とするのはこれらの動詞を使った可能表現

である。

可能の意味に関しては多くの論考がある（坂梨 1969、小矢野 1978,1979,1981、青木伶子 1980、金子 *ibid.*、寺村 1982、奥田 1986、井島 1991、渋谷 1993、尾上 1998 など）。これらに共通するのは、可能とは物事が実現するかしないかを表し、そのプロセスにおいて実現を可能にする働きかけが存在し動作主の意図・期待の成否に至るということである。つまり、可能の意味は〈物事の実現・未実現〉〈働きかけ〉〈動作主の意図・期待〉によって成り立っているというわけである。このことを基に、可能である根拠がその対象に属しているか、周囲の状況に属しているかで、前者は「内因可能」（または「能力可能」）、後者は「外因可能」（または「状況可能」）というように意味分類がなされている。内因可能は能力や属性を表し（例えば「私は１００メートル泳げる」「このきのこは食べられる」）、外因可能は許可・不許可や可能性を表す（例えば「この部屋に学生は入れません」「図書館でビデオが見られる」）。

可能は基本的には潜在的・恒常的状態を表す。動詞のル形を基本形とするならば、例えば「太郎は英語が話せる」と言うと、実際に起こる出来事ではなく（「潜在的」）、能力という太郎の属性（「恒常的」）から、太郎がどうであるか（「状態」）を表している。可能は「状態」であるので、意志的行為の表現（例えば「(話せ)たい」「(話せ)ましょう」「(話せ)てください」「(話せ)よう」）と相容れない。また、可能は〈潜在的〉というプロトタイプを有するので、「何かが出来た」というように現実化した可能事態を表すには、語彙的操作による文脈づくりが必要である。例えば、「花子に会えた」と言っても実際に花子に会えたのかどうかは分からない。「久しぶりに花子に会えた」なら実際に会えたのだろうし、「もう少し早く来ていれば、花子に会えた」なら実際には会えなかったことを表す。ル形にしても、「明日花子に会える」というように語彙により文脈を規定することによって「会える」ことが現実化する。

2.2. 意志性

前節において可能は物事の実現・未実現という結果状態を表し、意志的行為の表現と共起しないことを述べたが、その結果状態に至るにあたり、動作主の意志が関与する。前述した〈物事の実現・未実現〉〈働きかけ〉〈動作主の意図・期待〉という可能の意味範疇の中の〈働きかけ〉において動作主の意志が関ってくるのである。この「動作主の意志」を動詞の語彙的意味として一義的に表しているのが意志動詞で、-eru/-rareru の接辞を付けて可能形となる。このように可能表現においては動作主の意志が動詞の語彙的意味として顕在するほかに、文脈の中に動作主の意志が潜在する場合がある。それが無標可能表現である。

無標可能表現では状態変化を表す無意志動詞が使われ、語彙的には動作主の意志は表されていないが、事態の実現への働きかけとして動作主の意志が潜在する。このことは、動作主の意

志が含意されなければ、単に状態を表すだけで無標可能表現とはならないということである。

（８） ａ．このドアは建て付けが悪く、開かない。
　　ｂ．この漂白剤は服の色が落ちない。

（８a）はドアの状態、（８b）は漂白剤の効能を述べているだけで、動作主の働きかけによる結果状態を表しておらず、可能表現とはならない。

さらに注意しなければならないのは、動作主の意志が発動するのは動作主がこうありたいと望むからであり、その期待する結果の実現を問うのが可能表現である（渋谷 *ibid*.:9、姚 *ibid*.:94-96、呂 2006:60）。したがって、（９a）（９b）のようなものには可能の意味は存在しない。

（９） ａ．この薬を飲むと、かえって気分が悪くなる。
　　ｂ．一生懸命勉強しなかったら、試験に落ちる。

（９a）（９b）はそれぞれ「この薬を飲んでも、治らない」「一生懸命勉強しなかったら、試験に受からない」とすれば、それぞれ「治る」「受かる」という望ましい結果の成否について述べているので、可能表現と認められる。

では、どのような動詞が意志動詞または無意志動詞として捉えられるのか考えてみる。意志動詞は動詞の意味する動作・状態の成立が動作主の意志に動機付けられるものである。事態を「こうしよう」「こうするまい」という意志で操作できることから、「自制的（self-controllable）」（久野 1973:86-87）で「自己制御性」（仁田 1988:35）[5)]を有するものである。そのような意志的関与がない動作・状態を表すのが無意志動詞となる。このことより、意志動詞と無意志動詞の区別は、動作主の意志の関与の有無によることになるのだが、動作主の意志の関与は概念的で感覚という内省に頼らざるを得ないので、「意志」か「無意志」かの区別は学習者にとって必ずしも容易ではない。意志的表現である「～たい」「～つもり」「～ておく」などと共起できるかどうかという統語条件により意志動詞と無意志動詞を区別する方法もあるが、これも意志・無意志の判断が基となるので、学習者にとって難しい。それゆえに、日本語教育において語彙リストなどで品詞や意味とともに意志か無意志かの情報も明示すべきであろう。

しかし、気を付けなければならないことは、同じ動詞でも使い方により意志動詞にも無意志動詞にもなるものがあるということである。例えば、「落とす」という動詞は以下のように使われる。

（10）ａ．私はためしに近くにあったこぶしほどの大きさの石を中に落としてみたが、どれだけ待っても何の音もしなかった。

（村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』）

ｂ．しかし、いくら探しても部屋の中にはなかった。家から後楽園ホールへ来るまでのどこかで落としてしまったらしい。指輪は何でもないガラス玉がはめこまれているだけの安物だという。……

「落としたとすれば……東京駅で乗り換えてからのことだろうな……」

（沢木耕太郎『一瞬の夏』）

「落とす」が（10a）では動作主の意志を表し（10b）では無意志的行為となっている。このような動詞は他に以下のようなものがある。前者は無意志動詞、後者は意志動詞の例である。

（11）ａ．郵便局へ行ったら、田中さんに会った。／ 明日田中さんに会う予定だ。

ｂ．辞書を持ってくるのを忘れた。／ いやなことは早く忘れたほうがいい。

ｃ．祖父は癌で死んだ。／ 彼は死ぬつもりだ。

ｄ．私は 1980 年に生まれた。／ 私は男に生まれたかった。

ｅ．何も食べられなくて１０キロやせた。／ ダイエットして１０キロやせるぞ！

ｆ．満月なのに雲に隠れていて見えない。／ 見つからないように茂みに隠れた。

ｇ．食器を洗っているとき、皿を割った。／ 母は夫婦喧嘩のとき、皿を割る。

このように意志性の有無が語義のみにより判定できないところに、学習の困難さが窺われる。

2.3. 自他性

学習者をさらに惑わせるのが、意志性と自動詞・他動詞の関係である。日本語教育においては一般に、目的格「を」を付けた名詞句が前接する動詞を他動詞、それ以外を自動詞として教えている。他動詞の場合、「食べる」といった動詞を例として導入するので、学習者は動作主から対象への動的働きかけを感じ取り、そこに動作主の意志を認める。こうして他動詞は意志動詞であると認識してしまう。しかし、前述の例（10b）（11b）（11g）を含め、以下のように他動詞文であるが動作主の意志が感じ取れないものもある。

（12）ａ．太郎は公園で変な男を見た。

ｂ．太郎は風邪をひいた。

c．この計画は危険を伴う。

自動詞にも動作主の意志を表すもの（例「行く」「笑う」「働く」など）と表さないもの（例「開く」「ある」「降る」など）がある。このように意志・無意志の区別と自動詞・他動詞の区別が相応関係にないことが分かる。

では、日本語学習において自動詞・他動詞の区別は無意味であるかと言えば、そうでもない。「～ている」「～てある」のように自動詞か他動詞かによって意味が規定される文型もあるので、自動詞・他動詞の区別は学習上必要なものである。これは無標可能表現にも言えることである。

無標可能表現では無意志動詞が使われる。しかし、無意志動詞のうち他動詞は除外される。なぜなら、無意志他動詞はほとんどが偶発性および「失敗」（石川 *ibid*.:78-79）を表すものであり（例「(財布を)落とす」「(皿を)割る」「(指を)切る」「なくす」「間違える」「忘れる」など)、〈動作主の意図・期待〉が存在しないことから可能の意味が生じない。残るは無意志自動詞であるが、可能は〈働きかけ〉というプロセスを経た結果状態を表すので、そのような状態変化を表さない「ある」「要る」「違う」「存在する」などは適用外となる。したがって、状態変化を表す無意志自動詞のみが無標で可能の意味役割を負うことになる。

このような特性は有対自動詞（早津 1987）[6]に典型的に見られる。有対自動詞は「働きかけによってひきおこしうる非情物の変化を表すもの」（早津 *ibid*.:83）であり、すべての有対自動詞が無標可能表現になるとは必ずしも言えない（姚 *ibid*.:93）との指摘はあるものの、無標可能表現であることの大きな指標となる。なお、早津は「有対自動詞の主語は非情物であること」としている[7]が、「受かる」「助かる」「育つ」などの有情物主語の有対自動詞も無標可能表現の構成要素として重要な役割を負っている。これらは「分かる」「慣れる」と同様に、動作主が自分が尽力したことの結果を自ら制御できず動作主以外の力に委ね、その結果を享受せざるをえないことから、被動的であると言える。また、「肩が痛くて腕が上がらない」のような文では「腕」は動作主の一部であることから、再帰的特性を有するとも言える。このような被動性と再帰性は「いくら押してもドアが開かない」のような非情物主語の可能文にも見られ、これが日本語における無標可能表現の大きな特徴となっている。無標可能表現における被動性と再帰性に関して、さらに詳しく考察してみる。

2.4. 被動性と再帰性

青木ひろみ（1997）は「自動詞における《可能》の表現形式」を、「主体の意志によるコントロール」の及ぶ範囲が「動作の結果」までか「動作/働きかけ」までか、または、「主体の意志性が表出できない場合」であるかによって類別し、-eru/-rareru の接辞形および「～ことができ

る」形との共起をはかっている。そして、「主体の意志によるコントロール」が「動作の結果」まで及んだ場合の例として、「太郎は運動神経がいいので、いつでも敏速に動ける」という文を挙げ、その意味構造が「太郎［主体＝動作主］→［動こう］［意志性］→太郎自身［対象/被動者］→（太郎自身が）動く［動性］」となることから「主体は動作主と被動者という二重の意味役割を担」うと述べている。被動性について青木はこれ以上の議論をしておらず、また無標可能表現はどうであるかという議論もないので、本稿での考察に繋げられないが、可能表現に被動性を見出したことは示唆的である。

以下、無標可能表現の意味構造を明らかにし、被動性・再帰性との関りを探っていく。

まず、無標可能表現の成立要素として以下のものがある。（　）は略語。

①状態変化を表す無意志自動詞（句）による結果状態：Resultant Situation(RS)
②結果状態の主体：Subject(S)
③状態変化の要因または条件：Causal Condition(CC)
④状態変化への働きかけ：Influential Move(IM)
⑤状態変化の影響を被る動作主体（被動者）：Patient(P)

これらの要素がどのように意味構造として表れているか、例を挙げる。

（13）ａ．新聞は、辞書をひけば、ほとんど分かる。

〈(私)〉〈(新聞を分かろうとする)〉〈辞書をひく〉〈(私)〉〈新聞が[8]ほとんど分かる〉
P　IM　CC　S　RS

ｂ．一生懸命努力すれば、試験に受かる。

〈(私)〉〈(試験に受かろうとする)〉〈一生懸命努力する〉〈(私)〉〈試験に受かる〉
P　IM　CC　S　RS

ｃ．肩が痛くて、腕が上がらない。

〈(私)〉〈(腕を上げようとする)〉〈肩が痛い〉〈(私の)腕〉〈上がらない〉
P　IM　CC　S　RS

ｄ．いくら押しても、ドアが開かない。

〈(私)〉〈(ドアを開けようとする)〉〈(鍵がかかっている)〉〈ドア〉〈開かない〉
P　IM　CC　S　RS

まず、結果状態（RS）は主体（S）の状態を表しており、その成立は(被)動作主（P）の制御がきかない。しかし、主体の状態（S＋RS）は(被)動作主の意図したこと（IM）の結果であるゆえに、(被)動作主（P）の動作・状態に還元される。こうして(被)動作主（P）は制御不可の要因により自らの動作・状態が決められる。このように被動性が認められ、(被)動作主（P）は被動者の意味役割を負う。この場合、(13a)（13b）（13c）に見られるように主体（S）が(被)動作主（P）自身またはその一部である場合、再帰的となる。

ここで大事なことは、(被)動作主（P）と主体（S）は「P⊃S」のように包含関係となっているということである。例えば、(13a)（13b）（13c）では主体（S）は(被)動作主（P）と同一もしくは(被)動作主（P）の一部となっている。このような物理的関係だけではなく、(13d）のように、主体（S）が状態変化への働きかけ（IM）を介して(被)動作主（P）と何らかの関り（例えば、働きかけの対象や手段）があれば、包含関係があると言える。このような有縁性がなければ、可能の意味は生じない。上記（13d）と以下の（14）を比べると、(14）は(被)動作主（P）と主体（S）との有縁性が見出せず、単なるドアの状態を表すのみとなっている。

(14)（＝８a）このドアは建て付けが悪く、開かない。

〈(私)〉	φ	〈建て付けが悪い〉	〈ドア〉	〈開かない〉
P	IM	CC	S	RS

次に大事なのは、状態変化の要因・条件（CC）に表れている主体（S）の動作・状態が結果状態（RS）を引き起こしているということである。つまり、結果状態（RS）成立の要因・条件（CC）が主体（S）自体にあるということである。主体（S）が非情物である場合は主体（S）自体の状態が、「私」または「私」の一部である場合は「私」の動作あるいは「私」の心身の状態が結果状態（RS）成立の要因・条件（CC）となる。これに対して、他動詞の可能形を使った可能表現の場合、内因可能あるいは外因可能の解釈がなされ、動作主の能力や周囲の状況が事態成立の要因となる。

例えば、一般的に知られている「ドアが開かない」と「ドアが開けられない」の違いがある。「ドアが開かない」の場合、鍵がかかっていたり建て付けが悪かったりというように、「ドアが開かない」原因が主体であるドア自体にあるので、「いくら押しても、ドアが開かない」のである。一方、「ドアが開けられない」の場合、両手いっぱいに荷物を持っていたり利き腕を怪我していたり（内因可能）、または会議中だったり規則で入室禁止だったり（外因可能）で「ドアが開けられない」ということである。石川（*ibid.*:67-73）もこの問題に触れ、他動詞の可能形は「実際に物に対して試みた結果ではなく、それ以外の条件や自分自身の能力について述べる場合に

使う」と述べている。ということは、自動詞可能の場合は「実際に物に対して試みる」ことが必要なのである。これはちょうど「状態変化への働きかけ（IM）」に当たることで、日本語教育現場で無標可能表現の特徴を教える際に１つのヒントとなる。

以上、無標可能表現の特徴を見てきたが、これらの特徴が学習者の母語と異なるものであるならば、単なる形態レベルでの違いではなく概念レベルの違いが見出され、それが誤用に繋がることは想像に難くない。その１つとして、被動性・再帰性が挙げられる。

例えば、学習者が「日本語が分かれる」「大学に受かれる」「日本の生活に慣れられる」という日本語の文を発したとしよう[9)]。もし、この誤用が母語干渉から来るものであるとするならば、学習者の母語では可能は有標形態で事態の実現・未実現のみを表すと考えられる。特に「分かる」「受かる」「慣れる」は主語が有情物であるので、学習者はそこに能動性を感じ「何かをしようとして出来た・出来なかった」というように他動的に事態を捉えるであろう。それゆえに、「分かる」「受かる」「慣れる」に他動詞の可能形式を適用してしまうのである。

しかしながら、日本語は「なる」型言語（池上 1981）と言われるように、動作より結果の側面から事態を捉える傾向があり、特に被動的事態においては結果性が優先されることが認められる。これが、可能を他動的事態と捉え実現の可否のみで可能形態を表す言語と大きく違うところである。学習者の母語では被動的事態も動的に捉えられ、有標形式で表されるところを、日本語では被動・他動の区別が非常に大事であり、被動の場合は結果状態が優先される。このようにして、無標の可能表現が成立するのである。

おわりに　－日本語教育の視点から－

これまで見てきたように、日本語の無標可能表現には被動性・再帰性が認められ、可能を一元的に他動的事態と捉える言語と大きく異なる。後者が学習者の母語ならば、日本語の無標可能表現に対して誤用・非用が起きやすいことは容易に推測できる。また、無標可能表現には、１）動作主と結果状態の主体が有縁関係にあり、主体が動作主の一部または動作主と同一である場合は再帰的となる、２）結果状態の成立要因が主体に帰する、という大きな特徴がある。

無標可能表現は日本語として特徴的であり、日本語らしい表現の１つである。それゆえに日本語教育において積極的に取り上げていかなければならない。しかしながら、いわゆる「直接法」で教える場合、学習者に概念的特性をなかなか伝えられない。学習者の母語または共通理解言語での説明が第一に必要である。その際、対照言語学研究の知見を積極的に採り入れ、日本語教育に応用する努力を怠ってはいけない。これは語彙の母語訳といったことからでも始められる。例えば、「分かる」という単語の英語訳を単に“understand”とするのではなく、“be（come）understandable/comprehensible”（Jorden1987:29,357）とすると、語尾の“-(a)ble”

で「分かる」自体に可能の意味が含まれていることを認識し、「分かれる」のような誤用が避けられる。このように媒介語を効果的に利用して学習効率を上げるべきである。

学習者のことを考えるならば、我々日本語教育者は「直接法」の幻想から抜け出さなければならない。

注

1) 動作や状態が動作主の意志によるものではないことを表す動詞。「わかる」「できる」のように語彙そのものに可能の意味を含む動詞も含む。意志動詞と無意志動詞については２．２で詳しく説明する。

2) 調査した日本語教科書および教師用指導書は以下の通り。
   1. 『みんなの日本語初級Ⅱ翻訳・文法解説英語版』（スリーエーネットワーク 1998 年）
   2. 『文化初級日本語Ⅱ教師用指導手引き書』（文化外国語専門学校編 凡人社 1990 年）
   3. 『日本語初歩』（改訂版）（国際交流基金日本語国際センター 凡人社 1994 年）
   4. 『Situational Functional Japanese Volume 2: Notes Second Edition』（筑波ランゲージグループ編著 凡人社 1994 年）
   5. 『初級日本語　本文会話・読み物訳、文法解説　英語版』（東京外国語大学留学生日本語教育センター編著 凡人社 2000 年）
   6. 『実力日本語（下）単語・文法解説書（中国語版）』（東京外国語大学留学生日本語教育センター編著 凡人社 2000 年）
   7. 『新版　中日交流标准日本语初级（下）』（人民教育出版社 旧版初版 1988 年）
   8. 『新编日语２』（上海外語教育出版社 1994 年）
   9. 『高职高专新概念日语教程２』（楠本徹也・李若柏主編、北京出版社 2009 年）
   10. 『An Introduction to Modern Japanese』（Mizutani&Mizutani 著、The Japan Times, Ltd. 1977 年）
   11. 『初級日本語〔げんき〕Ⅱ An Integrated Course in Elementary Japanese』（The Japan Times, Ltd. 1999 年）
   12. 『Japanese: The Spoken Language Part 3』（E.H.Jorden with M.Noda 著、Kodansha International 1990 年）
   13. 『ようこそ An Invitation to Contemporary Japanese』（Yasu-Hiko Tohsaku 著、McGraw Hill, Inc. 1994 年）
   14. 『なかま１』（Makino Seiichi, Y.Hatasa & K.Hatasa 著、Houghton Mifflin Company. 1998 年）

3) 正しい言い方かどうかの判断は保留にして、以下のように「上手になれる」という言い方が見られる。
   残念ながら、これを食べたらシンクロが上手になれる、という魔法の食べ物はありません。(synchrocafe.ijiss.jp/modules/smartsection/item-47.html)
   私は日本に来てもう１年になりましたけど、まだ日本語が下手です。どうすれば、日本語が上手になれるの？(www.xiaochuncnjp.com/bbs/archiver/?tid-886461)
   明治図書 ONLINE『教師のスキルアップ術１誰だって授業が上手になれる』松崎力著 (www.meijitosho.co.jp/shoseki/shosai.html?bango...)

4) 言語の選択は恣意的である。本来なら各語族を網羅するように選択したほうがより一般性が増すのだが、今回は時間の都合上出来なかった。各言語の対訳は東京外国語大学在学の留学生や各言語を教えている教師の協力を得た。直訳ではなく自然な言い方を優先したので、対象となる動詞が訳に表れていない場合もある。可能の解釈にゆれが生じていると思われるところもあるかもしれないが、今回は資料の提示にとどめ、あとの問題は今後の課題としたい。

5) 仁田（1988:35）は「自己制御性」という概念を用い、意志動詞と無意志動詞を以下のように定義している。
   「自己制御性とは、動きの発生・過程・達成を、動きの主体が自分の意志でもって制御できるといった性質である。自己制御性を持った動詞が、いわゆる意志動詞であり、自己制御性を持たない動詞が、いわゆる無意志動詞である」

6) 日本語の動詞には「開く」「開ける」のように自動詞と他動詞が形態的に対になるものが数多くあり、「対称

的自他動」（松下 1894）「有対自動詞・有対他動詞」（早津 1987）と呼ばれている。本稿では学界で広く使われている「有対自動詞・有対他動詞」（対にならないものは「無対自動詞・無対他動詞」）の呼称を使う。

7) しかしながら、早津（1987）は「驚く」「助かる」「苦しむ」（p.84）「育つ」（p.85）を「有対自動詞」としてリストに挙げている。また、「受かる」のような自動詞は対応する他動詞との関係が「開く」「開ける」の統語的対応関係と同じではない（窓を開ける→窓が開く、試験を受ける→*試験が受かる）ことから、無対自動詞としている。

8) 「新聞が」の「が」は対象格を表す。

9) 望月（2009:101-103）は、中国人母語話者の「*病気が治れる」という誤文を例にあげ、「日本語では状態変化自動詞に、結果と可能の意味が融合されているのに対し、中国語では、行為、結果、可能の意味が個別に、分析的に表現される」ことから、「治る」に可能形式を付加して「治れる」としていることを指摘している。現場の日本語教師にとって示唆するところ大である。

参考文献

青木ひろみ（1997）「自動詞における《可能》の表現形式と意味―コントロールの概念と主体の意志性―」『日本語教育』93 pp.97-107.

青木伶子（1980）「可能表現」国語学会編『国語学大辞典』東京堂出版 pp.169-171.

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学－言語と文化のタイポロジーへの試論－』大修館書店

石川守（1991）「自動詞と他動詞の用法について―「人の視点」と「物の視点」に関して―」『語学研究』64 拓殖大学語学研究所 pp.35-80.

井島正博（1991）「可能文の多層的分析」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版 pp.149-189.

市川保子（1997）『日本語誤用例文小辞典』凡人社

乾とね（1991）「潜在的比較の表す可能の意義について―無意志主体可能動詞の可能の意義―」『上智大学国文学論集』24 pp.155-174.

大崎志保（2005）「日本語の自動詞による可能表現―動詞制約を中心に―」『日本語文法』5-1 pp.196-211.

奥田靖雄（1986）「現実・可能・必然（上）」『ことばの科学１』言語学研究会編 むぎ書房 pp.181-212.

尾上圭介（1998）「文法を考える―６―出来文（２）」『日本語学』17:10 pp.90-97.

金子尚一（1980）「可能表現の形式と意味（Ⅰ）―“ちからの可能”と“認識の可能”について―」『共立女子短大（文科）紀要』23 pp.62-76.

久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店

小林典子（1996）「相対自動詞による結果・状態の表現―日本語学習者の習得状況―」『文藝言語研究・言語篇』29 筑波大学 pp.41-55.

小矢野哲夫（1978）「現代日本語可能表現の意味と用法（Ⅰ）」『大阪外国語大学学報』45 言語編 pp.83-98.

――（1979）「現代日本語可能表現の意味と用法（Ⅱ）」『大阪外国語大学学報』48 言語編 pp.19-33.

――（1981）「現代日本語可能表現の意味と用法（Ⅲ）」『大阪外国語大学学報』54 言語編 pp.21-34.

坂梨隆三（1969）「いわゆる可能動詞の成立について」『国語と国語学』46-11 pp.34-46.

渋谷勝巳（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1 大阪大学刊 pp.1-261.

杉本和之（1995）「意志動詞と無意志動詞の研究－その１」『愛媛大学教養部紀要』28 pp.47-59.

――（1997）「意志動詞と無意志動詞の研究－その２」『愛媛大学教育学部紀要』29-2 pp.33-47.

張威（1998）『結果可能表現の研究―日本語・中国語対照研究の立場から』くろしお出版

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版 pp.225-284.

長友文子（1997）「可能形における自動詞と他動詞―日本語教育から見た可能表現の研究（二）―」『和歌山大学教育学部紀要』47 pp.9-16.

仁田義雄（1988）「意志動詞と無意志動詞」『月刊言語』17-5 pp.34-37.

都築順子（2001）「『可能の意味を含む自動詞』に関する一考察」『2001 年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会 pp.85-90.

早津恵美子（1987）「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』7 京都大学言語学研究会 pp.79-109.

龐黔林（1999）「日中両国語の可能表現について―自動詞の可能表現を中心に―」『神戸女学院大学論集』45-3 神戸女学院大学研究所 pp.47-59.
松下大三郎（1894）『國學院雑誌』12 月号
望月圭子（2009）「中国語を母語とする上級日本語学習者によるヴォイスの誤用分析－中国語との対照から－」『東京外国語大学論集』78 pp.85-106.
ヤコブセン、ウェスリー・M（1989）「他動性とプロトタイプ論」久野暲・柴田方良（編）『日本語学の新展開』くろしお出版 pp.213-248.
姚艶玲（2006）「有対自動詞による無標可能文の成立条件―〈可能〉の意味合成のメカニズム―」『日本語教育』128 pp.90-99.
呂雷寧（2006）「使用範囲から見た日中両言語の可能表現」『ことばの科学』19 名古屋大学言語文化研究会 pp.53-66.
――（2007）「可能という観点から見た日本語の無意志自動詞」『言語と文化』8 名古屋大学 pp.187-200.
Jorden, E. with Mari Noda. 1987. *Japanese: The Spoken Language Part 1.* Yale University Press.

例文出典

沢木耕太郎『一瞬の夏』新潮文庫
村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』新潮文庫

検索ツール

「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース（作文対訳 DB）オンライン版」（独立法人国立国語研究所 2009 年）
Google

On Japanese "Unmarked" Potential Expressions

KUSUMOTO Tetsuya

The paper analyzes the Japanese "unmarked" potential expressions. "Unmarked" potential expressions are the type of potential expressions using non-intentional intransitive verbs which remain unconjugated. In Japanese potentials are usually expressed by intentional verbs in potential forms. However, there are cases where non-intentional intransitive verbs convey potential meanings with no conjugation of potential forms. Some learners of Japanese are not familiar with these types of potential expressions and tend to conjugate intransitive verbs as potential forms in error. Errors are also made because of the difference, both syntactical and conceptual, between Japanese and mother tongues of learners. To see how they differ from each other, I asked students and teachers from different countries to translate several Japanese "unmarked" potential expressions into their mother tongues. It is found out that in many languages Japanese "unmarked" potential expressions are translated into the expressions marked by potential forms. This type of syntactical difference causes errors when learners produce Japanese "unmarked" potential sentences.

From a conceptual point of view there are two important features one should note about Japanese "unmarked" potential expressions. One is that, when an "unmarked" potential expression is structured as [Patient(P)] [Influential Move(IM)] [Causal Condition(CC)] [Subject(S)][Resultant Situation(RS)], P and S should have the relation of "P⊃S" and if S is a part of P or identical with P, their relation will be a reflective one. If this type of relation does not exist, the potential meaning does not come out. Other important thing is that CC belongs to S and so RS is realized by S's situation, not P's. Take a sentence "*Doa ga akanai* (The door won't open)" for example, to yield the potential meaning, the door is the thing P is working on and thus the relation is created, then the door itself is responsible for the *akanai*-situation(i.e. it's locked).

Lastly, for the learners, conceptual understanding is necessary to learn Japanese "unmarked" potential expressions effectively. A contrastive approach helps.